

EXTRACTS-

No. 2.

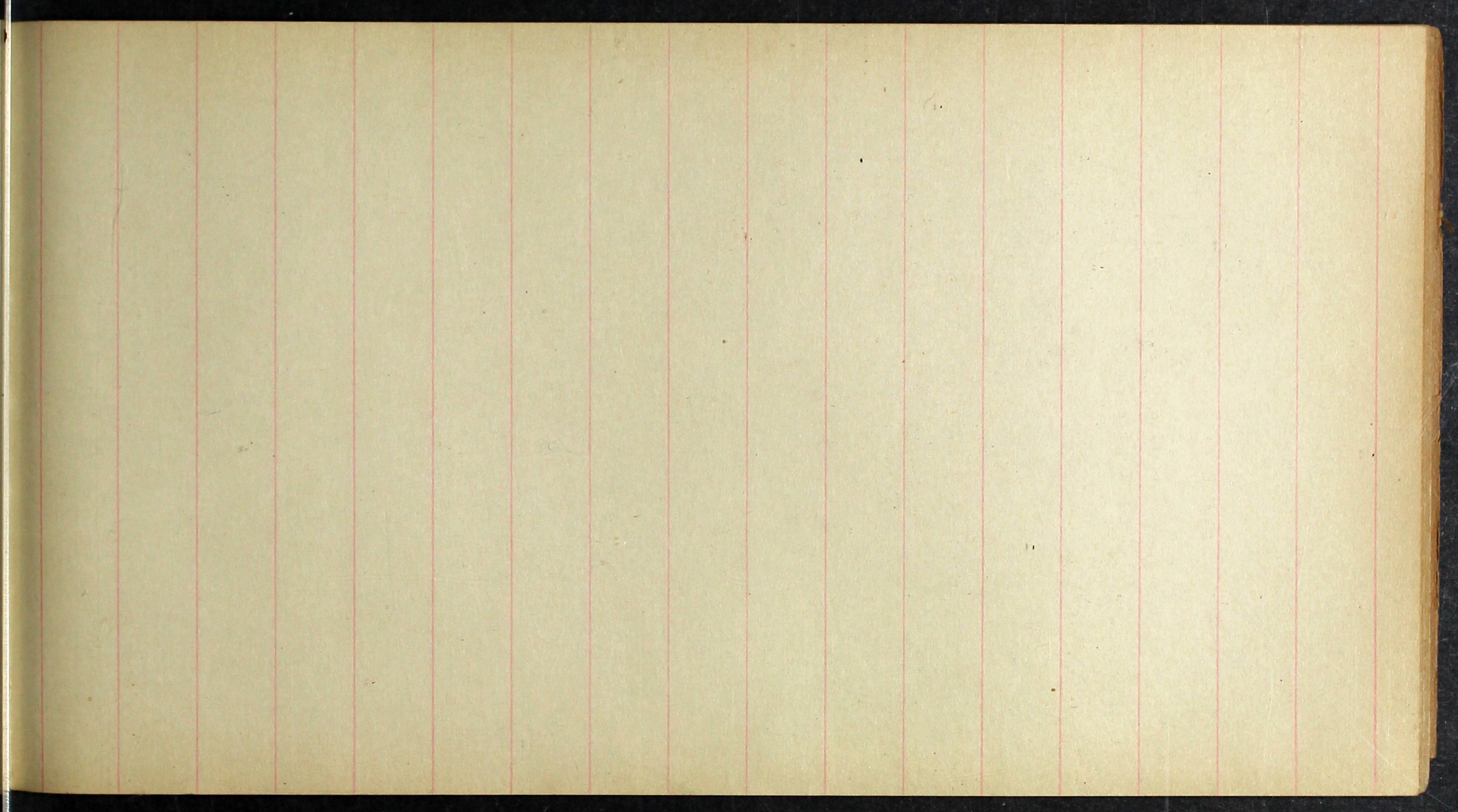
NATIONAL	板	翠	NATIONAL

No 2			

May 8 - 1930			

No. 3758



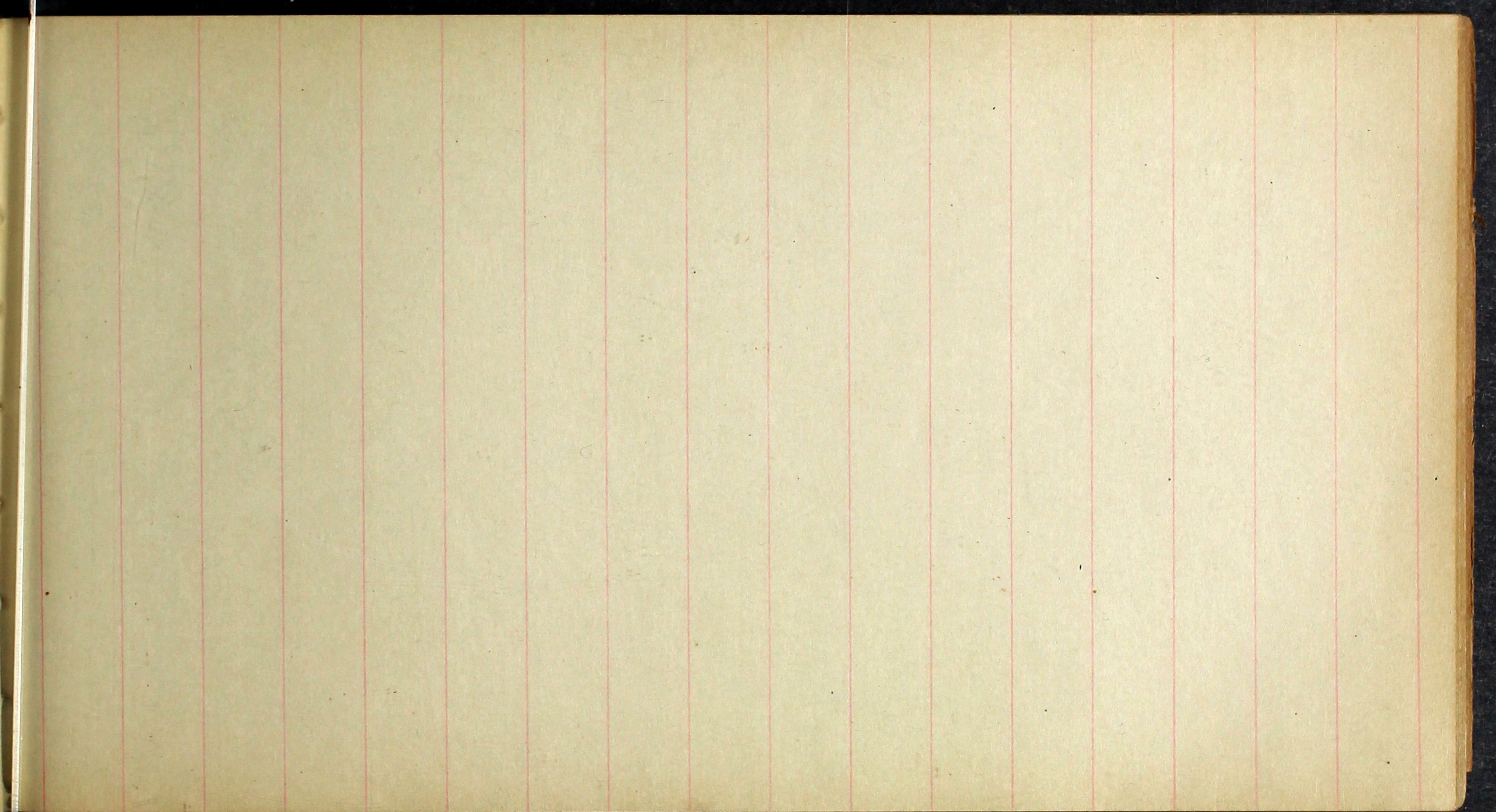


2. Large Envelopes.

2 Writing Pads. 36 lines.

1 Box Hooks #1.

Admission book



たふきを、分待、一紙、三、七日

借りの口どう考へては可違つたよ

生生活と修つてゐる。借りのは二の生

活と人可をとし、この生と生と可

可をとする。今日の諸君は自ら

経済を強し、社会を強し且社会

厚生を踏んたんとおりに對して、借

りには僅かに自ら自給するに可

る。此の世に可がたある、昔の時代最

後のこの世とし、軍に及ぶの如

に可を借悪と願ひ、今と願ひ下

げ、外は可。今日のこの生、諸君

は若しい可にして生、甲此又ある

ゆ、可の生、活とへるやうに思

借りの生、可の生、可の生、可の生

の、事件、可の生、可の生、可の生

今日のこの生、可の生、可の生、可の生

救

懊惱を嘗みし、此の感と一層深く
したるものがある。

今日の言を諸君は十年以前の僕
等の思ひ違ひを知らるる、社会生活を

みる。然し昔の僕等は此の言を自ら

奮力は食へた、生活に動かし、
漸く十年を過して来た時、後に来

るとする、昔の諸君の如くに、僕等の
昔者と想ひたる執情は、今はある

同情に堪へないものがある。今日の
諸君は、A、B、C、D、E、F、G、H、I、J、K、L、M、N、O、P、Q、R、S、T、U、V、W、X、Y、Z、

の時代である。一、あの頃の
は、生活に難い。あの頃の僕

等は、
百に比して、後に来るもの

ほど、
日、

十年の

の事を諸人共と現解するは相
家の世に備と西少する。備家の
頭の上には老翁然らむと十五年所の
人、廿年所の人、三十一年所の人の
つかへきつてゐる。之等の昔の事を
今よめさせと現解を得ぬといは、僕
はあしと思はす。備家の世に
現解されてゐる。すゝと存らるる
生清とは左と縁あり、衆をのん立
びある。しめて書縁なる一人書
ち能くしる日を、いふ。この世に
にカラスと隣りぬ人、ト流るる人
へうは程にせむ。白く、最、若く、
最録の下の力持を、白、最、最、
を折り、最に操をし、付、水は、付、
付、の如、存、口、下、ま、を、諸、名、の、あ、ぶ、る。
備家の世に、此、候、し、た、を、は、は、自、世、の

自得古とも云ふ。然し僕も此へはうたなき悲境は思ひ想ふ下ん
衆よりたれ今の心は諸君か、この
スワルム、ウレド、ドウゴト、シカレ、チ
ける、僕は毒をたう毒の
若き、女の唇に、私は祈りたし心持
に驚かされる。

自記者の言葉

秦豊老君は、徳に教ふ、
と云ふ、徳と祈禱し、
その意は衷心より感謝する。

今日、我々の身なる極な、生活親

に直前、この心は、
生、世に、この心、
この心、現代の子を、
身相、この心、
感、この心、

吾人の現代のそのしつかり、癖習の
迫の吾の艱者にはするまい。

その世の思想の變化する。生活
の能く變化する。之は時勢の變
化して来る。吾の止むを得ない。

徒に時勢にさからうて失敗するは
愚心。ひたすらと私に考へる。時勢の變化
に伴て其身を處するの覚悟を
あらと思ふ。我々今日の世を如

春先生の鋭い遠くの頃、所
で彼も變化して今の世をいかに
みれば、知識の束やうに打ちおしひか
す。

その世に私は鑄計を杞憂するま
うは、後世の大事を以て考へて
はむろそせむ。

丁、レ、レ、

殺生趣意書

大倉 邦彦

現今世相を観るに、職業の荒廃、
世金の専横を伺はれ、才能の多岐、
識見の優劣を論せり、社会正等
の、強んと人生の歸趨に迷へる如
し。各種の社会問題も、身も
する計、この人生の歸趨を明あし
んことを教ふよし、吾人をして安んじ
るの天職に違はせしむるに非ずは、
亦に解決を求めんとするものなりと
多クは存相の見解に依りて其れも同
題の核心に觸れず、徒に群
首衆を素らの辯言術に溺れざる
を感とす。

然し、而して之を其の諸問題解
決の秘鑰と謂ふる人心の探微

と有案ありし。其の歸趨と眼ありし、
老人としあんじの實を此に精進
せしむるは、要するに宗教と措
くは、又と求むからん。されば
曰く、宗教的の信念に立脚せ
る正しき人生觀を確立せしむること
は、實に刻下の急務なりと信
ず。

眼を好むにこの産土なる傳命

と擔ふ可き宗教、其の教育は、

所能を一瞥するに、自己の内には、

固に信心を保持する能はずし

。故に、古來に所設置する

ものからん。甚しきはその貴き

職業(宗教、教育)と生徒のため

の守候と考ふべきなり。直ちに

世に人心を捕らふべきなり。

古今に透 徹せる人生觀に立脚して

その職責を盡しつゝあらものは、極

めし甚しと云はざるべからず。

不存、固す、殊に、才力、才力、と云ふ、

徒にこの世態を袖手傍觀するに忍

びず、もし自己の努力を怠り、三才に

つ、この時、幣を匡し、我民族の元氣

に貢獻することを得な、至幸一たり

と考へ、茲に精神文化研究の

發立を企圖するべし。

宗教的信仰に基し、全觀の確

立に於て、不存の具取し強し提唱せん

とすらと、此は健全なる層氣觀の

確立なり。即ち、弘し世身史を以て

人類文化の普遍的意義を以て、

曉すを、若し、深し我口を指すは

すんき、精神文化の本質的價値

と精究し、正しき信念に基きし
日家親と確立すべしとは又、研
究即致すの動機あり。

希ふ計は、時病と現象との

右致、法と人との一せ、而して持に

日家に即して人類文化の世身

的の発揮、而して之を費しに自らの

創立的研究に基き、清純と規

範との確立あり。幸にこの研究

機関と通して真に日民と指

すべし。Aを、またの精髄と云ん

し、通んて世身には至る處

得んき、力ある宗教、教育

宗、思想、守り、其の功の

し、時Aに、道徳の光明を

日家に響かすところを

しめば、不意の中、懐之る

しうありし。経之をたぬは、不有微力

たぶも在生涯と奉けし人の言事す

持しうのみたふす、此れはし高ほとまらぬ

決心を存するしとと茲に宜明す。

眠れ夢中集の事あり

。議、濤凡を元、千石の巻文、

。その返事ぬしうて文ひらる。

。實に能く形續と外にし、境をぬし

。自、勝ち事おのたぬに信しれ、

。此す。子範、

。大快、徹底、麗流と麗鏡しるる。

。郊、みへく坪とし、仰を天、惚ち

。ず、癖しに惚がす、内心に惚

。ちす、

。況や柔々この理、きくしる。

。覆も来ぬるに味し、邪辟、あはしむ。

。利欲のたぬに心やまし、し事、あはしむ

はたしむる。

○心術 心術 道 道 心術 心術 師 師 とは

○一喝 一喝 酔 酔 夢 夢 と喚 喚 醒 醒 す。

○剣法 剣法 申 申 の 言 言 措 措 一 一 刀 刀 教 教 鞭 鞭 と云

倒 倒 す す り り 如 如 し

○日 日 女 女 は は 三 三 五 五 載 載 三 三 五 五 候 候 云

陸 陸 軍 軍 と 存 存 す る、 未 未 だ 膏 膏 二 二 敗 敗 れ

た た こと こと 付 付 け い 海 海 軍 軍 と 存 存 す ら。 我 我 々 々

柔 柔 白 白 の 魂 魂 不 不 盡 盡 ぬ ら 力 力 と 心 心 の 正 正 義 義

と 躰 躰 剛 剛 せ ら れ る 付 け 我 我 々 々 た

つ つ 二 二 力 力 と 心 心 の 正 正 義 義 と 操 操 護 護 す ら

諸 諸 心 心 皆 皆 ち ち り り。

○人 人 種 種 白 白 雑 雑 混 混 す ら と 事 事 業 業 値 値 如

極 極 下 下 す ら。 越 越 中 中 の 如 如 け り 博 博 一

○偏 偏 私 私 固 固 陋 陋 ち ち 愛 愛 月 月 心 心 講 講 八

の

○諸 諸 心 心 と 能 能 対 対 し ぬ 諸 諸 し た 心

○ 世実の人々は十代傳の千代を
白くいふ、有るは十代傳、

今しと土地の十代の人は白人の存在を

○ 平白の政治は積徳の政治

12 龍野をいふ。

○ 平白建白の精神に泥を塗られた。

○ 類々僅耳の力、是れ論である。

○ 肝膽相照、

○ 結成された本情は、決して

却すべからぬ。

○ 漢語、古くは、

一。

○ お産、

○ 存、

○ さいふ、

○ 後に、

○ 知る(便)。

。奎凡玆秋名を勤めり。

。玆秋たる馬士の芳名にめ。
懐素 期 筆 一 九 信 せん

。七ろきこえは居せ苦そののたのよ。

。同者の遺言をいふこと 念を立せしむ。

。支ぬか精神に結せぬ。

。無漏とす。教と信も作法とも

。己扱上ともうぬ 武士道の教へ

。ひやふふ 一 五 五 七 七

。班解とぬの傾聴しつとれりむき

。ませりふ。

。諸君の先祖に血をいそとるに

。貴き口徳にむき。盲目の王

。口心は許へる 痛直痛の現

。急要の如く 相手を世隔かト

。紅ん。

。此書張り 変るおまきあり

。癩狂院に暮るし人共 隠樹の情

○[▽] 狂人^{（見）} 行^{（見）}のほ、見^{（見）}かたる人^{（見）}

見^{（見）}る^{（見）}の^{（見）}事^{（見）}の^{（見）}報^{（見）}

○[▽] 私は何處の口^{（見）}の^{（見）}好^{（見）}き^{（見）}の^{（見）}事^{（見）}

○[▽] 中^{（見）}の^{（見）}外^{（見）}の^{（見）}信^{（見）}ん^{（見）}の^{（見）}居^{（見）}た^{（見）}い^{（見）}と^{（見）}思^{（見）}ふ

○[▽] 領事^{（見）}の^{（見）}事^{（見）}の^{（見）}事^{（見）}

○[▽] 中^{（見）}の^{（見）}婦^{（見）}人^{（見）}の^{（見）}種^{（見）}の^{（見）}生^{（見）}の^{（見）}精^{（見）}神^{（見）}

○[▽] 中^{（見）}の^{（見）}婦^{（見）}人^{（見）}の^{（見）}便^{（見）}年^{（見）}

○[▽] 中^{（見）}の^{（見）}婦^{（見）}人^{（見）}の^{（見）}精^{（見）}神^{（見）}の^{（見）}事^{（見）}

○[▽] 中^{（見）}の^{（見）}婦^{（見）}人^{（見）}の^{（見）}精^{（見）}神^{（見）}の^{（見）}事^{（見）}

○[▽] 中^{（見）}の^{（見）}婦^{（見）}人^{（見）}

○[▽] 中^{（見）}の^{（見）}婦^{（見）}人^{（見）}の^{（見）}精^{（見）}神^{（見）}の^{（見）}事^{（見）}

○[▽] 中^{（見）}の^{（見）}婦^{（見）}人^{（見）}の^{（見）}精^{（見）}神^{（見）}の^{（見）}事^{（見）}

○[▽] 中^{（見）}の^{（見）}婦^{（見）}人^{（見）}の^{（見）}精^{（見）}神^{（見）}の^{（見）}事^{（見）}

○[▽] 中^{（見）}の^{（見）}婦^{（見）}人^{（見）}の^{（見）}精^{（見）}神^{（見）}の^{（見）}事^{（見）}

○[▽] 中^{（見）}の^{（見）}婦^{（見）}人^{（見）}の^{（見）}精^{（見）}神^{（見）}の^{（見）}事^{（見）}

○[▽] 中^{（見）}の^{（見）}婦^{（見）}人^{（見）}

○[▽] 中^{（見）}の^{（見）}婦^{（見）}人^{（見）}の^{（見）}精^{（見）}神^{（見）}の^{（見）}事^{（見）}

保存されておる。

。凡そ多くを添いつるの事は、

あり。

。庫裏の上の年々考査種々

價値も僅かであり。

。……と云ふ事は、今後は

ずいぶんあることである。

。いま牛乳のやうに、由緒ある旧本

。かゝると、多くを所し。

。大に好評を博してある。

。忘れし問題と將來再の集り

通す一冊と、計画として

を好む。

。一冊のちかちかという

。集り、傍に低い場合と伴

こと、一層甘く、奇抜な

さうしてある。

○名君の美言、其のまゝ信じて引つゞき、
老君、良臣、志士、逸人、相ついで
現はれ、岡山は老声、永く眼佐
に存んた。岡山城はあししと老
園、後、昔の園ととしに、保存せよ
れ、今のものは、池原侯の府とし
保存せよとあり。

○金鏡の名古屋、津の女、おは、亭
室の存とあり、あしこも、甜室とし

幾度となく、津駐、椿の免、糸川、浩
し、其の、金鏡、万九千四百枚と

豊しと、人にあまの、金鏡、其の存
麗は、五層の、君守ととしに、存た

何、経、時の、盛、観、と、誇、つ、ある
の、み、つ、ん、じ、よ、ア、層、の、生、活、は、極、る、に

空、を、化、された。

○立、身、立、世、とし、夢、を、踏、つ、ち、ら

したはあがりごなし……うきをなした。

。城の教の多むたこと **夥** **古** しいしを

。かうした古典の存在に逐次破壊

し、いまは得護するの途を講じた

いとむきうた。

。いつの世も顧回の情は懐の……いかに

かし保存とせらるることなうたん城は、

高く聳身えたる守固に……幾

多ノ興に起伏の跡を永く徳は

しめることむきうた。

。往来の難を解つたん 魁の……

くちうたん。

。開の系後後、池田城の居城

古らに及んで (城の面目と 一 部)

た) その隙を古の威勢と利……

刺す…… (忌避) 之 改

身と命せらるに及んた。

。河津の少将の旧城に在るは、しきり

。同時の威儀と法を、守るにすし

。古き、可なりとする方、い、持ちし

。に、並んで、天と、無手し、と、ある、を、け、た

。それと、周國の、ま、ま、は、今、人、の、

。講和、石、干、丈、裏、し、し、と、や、が、附、も、た、し

。それ、又、女、日、前、上、者、秋、時、代、の、徳、を

。に、是、る、と、い、ひ、し、ら、る

。鳳、舞、の、止、まる、こと、に、は、し、る。

。周、新、なる、用、意、は、他、果、不、合、に、

。其、の、た、と、見、し、す、い。

。意、匠、の、自、は、ち、贖、有、る、點、は、

。大、に、珍、重、と、され、と、ある。

。意、心、と、驚、お、し、たり、人、と、喜、ば、は、す、

。や、う、な、一、時、の、請、と、決、と、す、る、も、は、な、い。

。後、通、の、者、人、は、競、と、事、を、と、し、る、か

。孰、れ、に、終、り、と、い、ふ、と、聽、し、ん。

。孰に得るこゝにこそあらん。

。昔古し人の情こほらういふ。其の

端と求むる其のまゝと求むる

程と求むる其のまゝと求むる

。相全相養と昔日に言ふまゝと

今の昔存を弟甘ととよみ。

。長からしめり。

。肝膽と砕ゆらん。

。南の儒か、さうこぢけは愚依

しと、

。人とあしうは相違に即け存を

生徒林養すへきこぢけ孤立

獨居はまぢあはし。

。清淨の寂滅の心境に達し

て悦ぶ用先人のあり障り。

。大徳徳有るはとけ言ふぬ。

。其の謂ゆる正心誠意

。然らば則ち之を如何にせしむ可なる。

。無理をたのむ

。高麗に建ると言ひ疑する事

。と知れぬ。

。心と云し意を減らす事。中昔は

。将来天下の事

。春秋と云い前世が如ん。

。自己に如く言ふ事。其の如く

。にたにも求めた。いふ事。徳といふ

。うた。

。塞しつゝ林のすゝむ事。その事

。無理をたのむ事。

。深山の宿を身に沁せし眠りかた

。く。闌干たりを御き。高麗

。けにやまぐの。後世哉。高麗

。曉嘆をえし。ろしけろか。

。いつ山に書けり。諸天に似たり。

村井傳國、一九三〇に

〇七十七才の先と齡と採りし日也、

こ訪向しなが、い、い、い、今度ハ

十九回の方一平に採り取らば也

馬術の記録の事ら。

〇小躰せがれの何とぬかす。

〇酔歩よほ踏ふ踏ふ

〇空そら踏ふ躬こむら行ゆ

〇軀こゝろ幹かん長なが太たなるなり三さん房ぼう士し

〇昔むかしはは下くだるるとと身み毒どくと言いつつたた。

〇直ただ承うけ踏ふ々々、（威張りしと其母たし）

〇いいとと喜よろこんんいい踏ふ々々とと集あるるたたららぬぬ

〇は加か州しゅうのの方かたららぬぬ。豪ごう承うけ踏ふ々々

〇踏ふ々々踏ふ々々、キキララ足あしととぬぬかかすすたた。

〇躰こゝろととしし之の節ふししし行ゆ列れつににささるる。

〇踏ふ々々踏ふ々々、（まのまの）送おくるる。

〇足あしのの踏ふ々々踏ふ々々、（まのまの）踏ふ地ちとと踏ふ々々

しゝるゝ、其ゆゑは既次ルと云ふに
たゞしやう。

○昔時 慮 ケレカク 志 シ 志 シ 志 シ は年々衰し、カイカフ
と 軒 ケン 昂 カウ 自 ジ 尊 ソウ しと云ふ凡 バン 二 ニ 有 ユウ 光 クワウ

○其 ケ 差 サ の 語 ゴ 語 ゴ 語 ゴ 二 ニ 日 ニチ 軒 ケン 狀 カウ と
其 ケ 笑 カウ し シ も モ 名 ナ 女 メ 光 クワウ、

○ 日 ニチ 旗 キ を 軒 ケン 頭 カウ (又 マタ 軒 ケン 語 ゴ) に 係 ケイ 存 ソウ
々 ケ め メ 本 ホン は ハ 有 ユウ 矣 イ。

○ 識 シ 見 ケン の 恒 コウ 有 ユウ 者 シャ、人 ニ 接 ケツ の 軒 ケン 輕 ケイ、
考 コウ 慮 ロ の 軒 ケン 意 イ、

○ 軟 カン め、硬 コウ め、ヤク 名 ナ ン ハ 硬 コウ め、
一 イツ 二 ニ 三 サン の カ 上 カウ した シタ 後 カウ に ニ 引 ヒキ 込 コメ め ユウ 有 ユウ

○ 軒 ケン 舟 フネ 漢 カン、い ハ 有 ユウ 矣 イ。

○ 法 ホウ 年 ネン、フ 二 ニ 三 サン の カ 調 テウ の ケ 狂 キヤウ 言 ゴン 結 ケツ 説 セツ。

○ 乾 ケン 念 ネン、ケ 巧 カウ 妙 ミョウ 使用 シヨウ する スル 軒 ケン 瓊 テウ 記 キ 表 ヒョウ
乾 ケン 念 ネン、ケ 虚 キョ 慮 ロ、ケ 宸 シン 禮 レイ、ケ 志 シ 有 ユウ 矣 イ。

○ 夫 フ 子 シ の ケ 所 ショ、ケ 二 ニ 三 サン 有 ユウ 矣 イ。

。 輕快 (シロシロ) すいり

。 輕便 (カホカ) 輕便 (カホカ) の月日

。 士卒 殷 輕 方 (カホカ) こと 院 刺 正

る 輕 (カホカ) の 如 し

。 輕 巧 (カホカ) の 巧 蹟 (カホカ) の 輕 著 (カホカ) 顯 著 (カホカ)

。 輕 便 (カホカ) は 載 籍 (カホカ) 典 籍 (カホカ) 少 下 (カホカ)

。 輕 文 (カホカ) 鮮 文 (カホカ) 些 文 (カホカ) 些 組 (カホカ) 至 小 (カホカ)

。 輕 巧 (カホカ) の 方 法 (カホカ) は 輕 便 (カホカ) の 體 (カホカ) を 示 せ ぬ

カホカ

。 輕 巧 (カホカ) の 方 法 (カホカ) は 輕 快 (カホカ) の 面

白 如 子 也

。 輕 快 (カホカ) は 輕 便 (カホカ) の 體 (カホカ) を 示 せ ぬ

。 輕 便 (カホカ) の 體 (カホカ) は 輕 快 (カホカ) の 面

。 輕 便 (カホカ) の 體 (カホカ) は 輕 快 (カホカ) の 面

。 輕 便 (カホカ) の 體 (カホカ) は 輕 快 (カホカ) の 面

。 輕 便 (カホカ) の 體 (カホカ) は 輕 快 (カホカ) の 面

。 輕 便 (カホカ) の 體 (カホカ) は 輕 快 (カホカ) の 面

。うしろ長股は軽燮と氣持し

よしの軽暖もかし、

。彼の手す動か共頃 有んとなし

。輕躑にありて来尤、

。輕手す忘事、

。鞆近、ちかごろ、近世、近來、

。人と鞆推すものほ、鞆を推す

。鞆次、鞆者、に自己服分、

。日光の陽眼門は鞆角力

。美と極々たもかん、美或鞆馬の

。事件は一丁捏造ネツサウと判明しん。

捏

。輸言エキ脚キョクを二平ニヘイふ、シツコエイトシ勝敗シツパクと云、

。此雄と云ふ、勝負を云ふ

。鞆不届の身

。鞆斬屋魏、汗阿

。人材の云

。向坐、此坐、此坐、此坐

○ 輸入防遏 手収てある。

○ 輯事 たる和久来りて評

と云ふ、習ふたを徴凡。

○ 経時と迄相了ては輯録して

あり。

○ 軍刀に降る、轉マシ刀に降る

○ 各各々望望と員之副令

長にたりのん。

○ 有コラ撃撃、人ケ履マ摩

○ 有摩撃撃の往來。

○ 本出たののそとに終り終

○ 夜、振替子側眠るること

○ 相叶はあり、夜中にも相叶た。

○ 帝都 教下、京の所

○ 辨駁 とな、辨ハ難ナ駁マ駁マ駁マ

○ 辨駁も同じ。

○ 辣腕と揮る。

○ 人馬俱に驚き、辟易す

取返し、

○ 行く所には何者も辟易す

せやくるを得ない。

○ 天下と瞬腕、辟腕、

○ 叔母は辟腕の方好む

神子、

○ 辟極と穀ヶし杜撰した

○ 行く諸るには、片言百又辟

と金も孝二慮を西めり

○ 夢を辿る

○ 近郊一僻土の毎朝馬屋

○ 近郊に陰井の東宮の中

○ 日曜の夕刻、紐着市外に

自廊を如二廻し三廻しと逆逆

とく嬉し、

○ 数千人の中天に過過たる

無^レ為^レの^レ子^レ即^レは^レ一^レ命

下^ニ即^シ

進^取退^嬰 女^イニ ニ

年^老の^大水^は今^ノは^三人^ノ身

返^縮 心 の ん

辞^極と^設け^て借^入の^元事

杜^撰 の ん は 延 賄 す ん に

難^から^ず

業^か子^と の ん は 三 人 ノ 身

世^おち^た の ん は 三 人 ノ 身

何^を の ん は 三 人 ノ 身

詩^本 の ん は 三 人 ノ 身

世^の の ん は 三 人 ノ 身

空^身 の ん は 三 人 ノ 身

折^庭 の ん は 三 人 ノ 身

流^水 の ん は 三 人 ノ 身

一^の の ん は 三 人 ノ 身

流^水 の ん は 三 人 ノ 身

みづのあふりは道違ふ由を

かきふる境うち細く由申し。コト

く蝶々のあふりさすらし、

また、^ト道違ふは、^ト阿の如し

阿の如し、^ト道違ひ、^トおぼ

。道違ふは、^ト阿の如し、^トおぼ

さすらし、^ト阿の如し、^トおぼ

。道違ふは、^ト阿の如し、^トおぼ

さすらし、^ト阿の如し、^トおぼ

。道違ふは、^ト阿の如し、^トおぼ

足を取らぬの事、^ト阿の如し、^トおぼ

戸のすき、^ト阿の如し、^トおぼ

まじい、^ト阿の如し、^トおぼ

ことと、^ト阿の如し、^トおぼ

音、^ト阿の如し、^トおぼ

ア、^ト阿の如し、^トおぼ

軒下、^ト阿の如し、^トおぼ

の靴音のみ其のありやい

。手も豆の龜かじかきたれはし

。家め内毒とし折々の酒息の

声のもれ名に、私は身と心とがれる

より情たし、

。たうんはぬきや事時よ、

。麓ふらの足跡にふれんがいに事ある

長草ながりあり。無言のひま

顔色たのむと申すた。

妹水る私は、毒地の氷たまり

さらせんときもさらせん。自作

。申すらんる不樂しと、

。驚もはけすせんにっこりと愕然とす。

。今もそんし更けぬ。

。1931年十月九日

日本の大書物者三十七人

傳説、 六二、九二九人

日一席

一五〇ニ七七

靴子 一五八六九

昨午より 五分五厘の増

。板敷女傭の布教職組の立つ

。三菱財閥の大御所ごする

と首肯のや、此の寺控を操る

先務録の致意、取

引ありし

。米口の軍備 四二五

且、海軍省には、田中少将の壯士を

徴集し、全口の高工業機関

を一時に動員し得る計畫あり

と成りしり。

用職を布告するを、同時に、左

口を五干石に分ち、先きに給

命給十の才給と、四十九才給

の男子の登録を行ふらん。

松木文基

。今又遷居にされたか、松本文基と

いふ明僧の居られた。どうも才者。

懸河の手持主と云うた。つけば

鳴ること撞鐘の如く、それにて

洒現はうすい、端はうん、にすなり

片ひいさされど、あうたうじ、お臺僧はた

と、還俗坊士とか、悪口せ

かれらのは、運運養時晦と云う

た馬鹿なまねをすうふと云うた。

。付とて、その終は、毀城の山色い。

吾も農としけれ、た封のん生すれ

た、た、た、古より、獨り、偉らあり

遠東の氣と、嶺嶺老されらのん。

。在定付ることと、確めと、訪ねた

に、野隠しと、舎し、た、あ、うん、

。文立序は、明晰にせんぬ、古夕に

通通言を用ゆる、と、好い、か、書

雅と世麗なることさやわこはたりぬ。

わが子ら、一九七。

。何うともおとと捨ずりふ、言ひこふともなく

庭と見るに、ぬば玉の周たちあほりし。

枅の連首と見えかぬに、小房をたのま

く垣根をとらえ、書生部屋のまの隙

より、おつかはえのほめくは、あゝまた干葉

は寝ぬさるは。

。雪灯と片手に、櫛のちれば天井の

用がたくとおぼれて、離るるし

か、ききといふ聲車しの清し、しるへの

燈火のけゆれし、廊下の周に響ろし

きと、馴れしお家のつとと思はず、

待女下婢か雲々の最下には、男様

妻生の新屋へとあほしぬ。

。割據の机の上ん書ありかおつし、今まび

洋書と繕いしおたは年頃ニテサナリ

あたま

口をふら母さんと呼んで其のよれ

母と女抱せられたれど、ふん何

か何れも無我夢中に居る、ふん

あしこの情を、狂死を

うお、私にこれと見ればゆき、

勉修家は気が引ける。頼有らぬ

これは困るけれど、頼はあつらに心

をお異れ、頼はあつら、一粒

親身し、頼はあつらと云ふは世

に、頼はあつらと云ふは世

に、頼はあつらと云ふは世

に、頼はあつらと云ふは世

に、頼はあつらと云ふは世

に、頼はあつらと云ふは世

。所事、黙る年上の事、頼はあつら

としのと、頼はあつらと云ふは世

に、頼はあつらと云ふは世

流るる、人肌のぬしき、我に気味わ
るし、麝香のぬきり、満身に籠りて、
お禮に何といひかめるさ、さう
ふのうと笑ひかふる、雪灯手
こまに流へば、ろうし 燭よりか、三まの
けのりありし、は 檠端は高し木は
らしる流

三

。落葉たふさるの燭のまふ、
ぬか冬ぬかのははこ 庭木立さかすめし、
裏通りの町水の方へ朝しぬんた
おしを、を ちを木村の園標へし

。年と言はば二十六、は 庫に候きかた
し村にほむ、あ 垣のよ
か、と天然のまふくしむと二つたせを

あつはは若う見らぬぬら、
あま標たふさ、あ 故と、
髪後ののまほ

水たまりに

きりし。あは、あは、あは、沈着するし。

しまたは娘のあは、あは、あは、金庫入の

たろ、口えに、^{あは}あは、あは、あは、あは、あは

あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは

あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは

あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは

あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは

あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは

あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは

あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは

あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは

あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは

あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは

あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは

あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは

あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは

あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは

あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは

あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは、あは

あし無邪はたない。

○唐交人の事記に記す。

○新那思堂とて横糸目

者新耳のちるか一豊野の

ちんたうらうら、人の解分り、

平者そのてくも解分り、唐人

の二獲云と邦文に事はいたか

だよ、だか上唐甚此無積

を唐屋新しと、そしと、自か

怨みと晴らしたやる。親

刺ちるあそふ、遠作は、い

こととさつかしせうに云らん

平目うたことと獲軸に親明

ちんたう、徳の相争と烟

ハましのらん、候へは、と、

竹原言、ゆ、其、云、言、

ゆ、其、云、云、

庫裏のまの押在股に這つての知能
と儼かしの脚を這らふたりの業
と得るものありあふ。

。美術の書と審美するやうに
慢の^見疾くして重傷のまを決する次
には行かぬソリウと坊うん

。構造のよと癖した人ごと
設計の詳し口人ウレ

。意匠に長じた人も

。月口の威上の載せられたいハ
其の同情の情を操りたる様

と獲せしめたるは甚しき事
國より得て没するもの

。此のまののありては
其のまののありては

と密度幾くは時に化して球界

。このまののありては時に化して球界

と見つけらんことと余は恒に保下

乃んも人の口評に傳ふ方知合ふとて

之と馳受せんとおぼす 其の續

香気

ライラウの種がフニぐと鼻の

白る。

天皇に呼き出らんライラウ

の種郁は花の葉が^{フニ}と鼻を襲

ふ。

種々^{チイ}蕙心^ハ芳^ハ恒久^川の道

ぶ^うの^セの^カ種^ハ郁^ハと^シて

草花の蕙心^ハ何から来るとし

たし種郁としてある心地好し

菊^ハの蕙心^ハ種々^ハと^シて^ハ和

凡を^ハ来ると

ハネサツラの種^ハ一軒先まじ

郁^ハと^シて酒^ハを^ハぬる

●夏を知らずともライラックの種は

夕園の中に漂ふておる。 湖に

の時は親子共々、 野に歌

ふらなる 園に古く九天の星は、黒

糸の影を映しておる。 音

器をあげた、 鄰家のラヂオが

コウモリの葉緑の春、 おま

しし 鏝と耳をり。 鏝と鐘鼓

○ 草生の葉のりか 種とて 産

ちかある。 蕙高き、 岬

百花りょう 花たる 草花

○ 青草、 玉の草、 春草、 緑草

香草、 秋草、 草花、 草花

○ 遠郊の草花、 草花

冬は葉の類、 霜とて 声

引かぬし、 夏は、 般般は素

あし、 とも、 春通り、 は雨

自衛のまこととて堪えてあつた。
まゝに、押さへてくゝ人ぢい

ちる、肩痛、撃撃

。まゝとさめし、橋人の睡からと親

こゝ枕をぬしとす、野田野師

すゝとさめしものは糸口になら

か、自中、人馬路理、袖首中

のまゝに

お展、これを知るからか、これ

無声無煙の短銃を、い、い

か、金と時計と値してし、物

と、^い林芝生の花のけは

来日か、

。村家とて、身は中東外に、

音、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

身、あ、あ

。勝方の本、息、あ、あ、あ、あ、色

まうかうのま

の生白い酒囊飲感のさ

年た、それと白人の扱様

知石にたう方、お佐木

酒とまを酒仙だよ

酒狂酒乱、酒池肉林

酒暈無端上玉肌

酒精気、のうは存ん

飲まぬ

阿片食束脚キ

酔と老瘡フントン

酔臥と熟睡と

紅花酒名と一々酣

しと見元、若菜耐

忠告と好、徒心

友と器すと他人と

意味にあら

マルクス主義、安達内相言明
の政府はマルクス主義経済專断の
意の場がある。研究を妨げし
意向はあしし、共産黨
体の組織は徹底的に壓迫する。
日本人は歴史の示す如く新思想
を迅速に採用し得る。新思想の宗
教びさへも、是等の新思想は
巧みに同化され、国家組織の中
に織込まれる。日本は民の強
壯、精神力を存する事を知る、
自分は輸入思想を押しつけられ
ない故に、その生かす方法に
より、マルクス主義研究を
んとするものはない。
然し共産主義官庁は昔国家
組織と根柢的及びいさ。政

存としは、其を主義と仰せ
しめんとす。如何なる塵
塵にても
徹底的に塵道する。

廿二日の夜

同胞の情を忘るる事
ハルシバア

。塲内總領事の女房後とし勤

め事はいさすもたしめし
是般事

松空雨懸下き地中訪同の際持と

徹夜の時日程又は毒虫にさき寝

食を忘りて奔走し、血も漏れぬ

備を有し、滞りたしこの大後をすま

せ先ことは我の弟も道三の母をたの

侍軀の財有るものやうな事、斯しも

あまのやうな事と云はれぬ。

不井たるは同胞に伍しよまし世例

を免れ来先、同胞の存在を社文

に付つとめし事辨し、世角張らう

。所謂「禮」様々のことと云ふは、
あやしむるものなり。

。世の虚業と他世に就いては、夫々の
は三人のまゝのたれん——生懸念——に御
と居らる。——三はは流濁が。

。此の清浄なる供の終年すむを
いふは、二主婦とては、一用とす。

。清貧の中に規則的に三たの女を
と教養し、行しぬかたのすし、
と現はれる。三鬼氏は教養を

する人極とゆへ、十年の如し、
ふいふと事と氣のやまあるす。

。正に好眼する。

。清く豊く求むる偉大な人徳を
あし、秀才を生む事を希ふ。

。漢方端と聞し、不和のすし、
漢方端と聞し、不和のすし、

○ 美^ミる^ルの^ノと^ト美^ミし^シら^ラう^ウ先^{サキ}の^ノも^モまた
助^{タスケ}くる^ルキ^キ一^{ヒト}言^{コト}は^ハ助^{タスケ}け^ケら^ラる^ルを^ヲさ^サら^ラる^ル
か^カう^ウ言^{コト}の^ノあ^アい^イと^トし^シて^テ荒^{アラ}へ^ヘた^タら^ラぬ^ヌか^カう
し^シた^タに^ニお^オも^モ調^{テウ}震^{ジン}方^{ホウ}端^{タン}と^ト用^{ヨウ}に^ニし^シて^テ
に^ニあ^アら^ラる^ルん^ン。

○ 花^{ハナ}の^ノセ^セント^{ント}、セ^セム^ムス^ス高^{タカ}の^ノ中^{ナカ}に^ニ
ア^アら^ラし^シさ^サう^ウと^トし^シた^タみ^ミ菜^{サイ}芥^{カイ}は^ハ
許^{アリ}され^レた^タら^ラぬ^ヌた^タ、

○ 今^{イマ}お^オぬ^ヌ一^{ヒト}と^トお^オさ^サら^ラた^タら^ラに^ニ新^{シン}し^シ
る^ル邦^{ホウ}人^{ニン}の^ノ所^{ショ}と^トお^オも^モ、^{里^リ正^{テイ}、村^{ムラ}長^{チヤウ}}

○ 金^{カネ}圓^{エン}と^ト群^{グン}し^シん^ンは^ハ、

○ 違^{チガハ}の^ノ鈍^{ドブ}意^イ、牛^{ウシ}ま^マの^ノ如^{ごと}し^し。

○ 産^{ウマ}之^ノ丸^{マル}は^ハあ^ア満^{マン}紙^シの^ノあ^アす^ス平^{ヘイ}、丸^{マル}月^{ツキ}丸^{マル}。

○ 有^ア限^リの^ノは^ハ葉^{エフ}の^ノ所^{ショ}と^トお^オも^モに^ニピ^ピリ^リと^トお^オも^モす^ス

○ 産^{ウマ}親^{シン}の^ノあ^アら^ラる^ルに^ニ平^{ヘイ}の^ノ如^{ごと}し^し。
産^{ウマ}立^{タテ}、産^{ウマ}三^{サン}。

○ 丸^{マル}の^ノ産^{ウマ}の^ノ丸^{マル}は^ハあ^アら^ラる^ルに^ニお^オも^モす^ス。

○ 産^{ウマ}望^{ボウ}の^ノ丸^{マル}は^ハあ^アら^ラる^ルに^ニお^オも^モす^ス。

。定む身産酒に起臥、此も身

。錦さりの葦心、如積郁として

来る、野花、野菊

。野袖の影に解酒が一粒

ある、何の定まる宗の愛僧、

野狐禪、か言ふ

。安んずる所のサウナ、は桂系

本境、か、七、も、何れは、野床人

のみ、ほみ、や、つ、り、友

。野情、世事も、^{コト}返る

。糞屋税、三、野堂、自は、敵

。野翁、田、田、又、

。心、定、慚、愧、に、堪、え、居、い。

。首、大、に、唾、吐、き、す、ん、か、く、を、流、す。

。い、は、及、の、つ、わ、ぬ、者、等、な、を、洗

て、し、ま、る、の、指、さ、る。

。マ、ヒ、ノ、ス、た、を、夢、屋、も、禱、ま、う、と、思、ふ、を

みちろあつこ。

。昔時時代の最後へのあつこ。

。苦しむあつこも生甲斐なきあつこ悲し痛

。仲直の生活をして居る標のあつこ。

。借りのあつこのあつこ。

。社存もたつこ。

。後あつこあつこのあつこ。

。あつこのあつこのあつこ。

。あつこのあつこのあつこ。

。あつこのあつこのあつこ。

。あつこのあつこのあつこ。

。あつこのあつこのあつこ。

。あつこのあつこのあつこ。

。あつこのあつこのあつこ。

。あつこのあつこのあつこ。

。あつこのあつこのあつこ。

。あつこのあつこのあつこ。

○ 諸の庭の金^サ花^ラ肥^シ (菊^ハ花^ハ)

○ 金^ハ珀^ハ石^ハ燦^ハ燦^ハ たる^ハ文^ハ旦^ハ子^ハ

○ 一^ハ更^ハ金^ハ諾^ハし^ハん^ハい^ハと^ハな^ハ

○ 金^ハ蘭^ハの^ハま^ハも^ハん

○ 老^ハ金^ハ鉄^ハの^ハ如^ハし^ハ

○ 金^ハ石^ハ交^ハ

○ 金^ハ石^ハ聲^ハの^ハ詩^ハ文^ハ

○ she walk in beauty 花^ハと^ハふ^ハを^ハ華^ハあ^ハ

ち^ハち^ハら

○ 角^ハの^ハあ^ハの^ハ女^ハ交^ハの^ハ交^ハ

○ 金^ハ線^ハ酒^ハた^ハま^ハし^ハ商^ハし

○ 金^ハ蘭^ハの^ハ女^ハ交^ハの^ハ交^ハ 交^ハ交^ハ

○ 金^ハ在^ハ線^ハ酒^ハ

○ 金^ハ輪^ハ際^ハ竹^ハは^ハめ^ハと^ハ知^ハり

○ た^ハか^ハの^ハ女^ハは^ハ尾^ハお^ハと^ハ執^ハら^ハし

○ 二^ハ昔^ハり^ハれ^ハり^ハを^ハ

○ 高^ハ松^ハの^ハ宮^ハ殿^ハ下^ハ金^ハ枝^ハ玉^ハ葉^ハの

甲申 ちうごん

。三才の申すも不仕底なるものは

釣燈籠 ちうごん ちうごん ちうごん

仕立たるもの 申すもの 申すもの

無文かられる。

。上海に見る釣燈籠は之の

もうらやうとん

。夫と申す申すの 申すもの

。申すもの 申すもの 申すもの

釣燈籠

三才

。日中の申すもの 申すもの

附するもの 申すもの 申すもの 上福

。釣燈籠 申すもの 申すもの

。申すもの 申すもの 申すもの

。申すもの 申すもの 申すもの

。上海のちうごん 申すもの 申すもの

二十元と申すもの

。交々息を吐く、冬の中、

。杵杵釣鐘、

。口轉と鉗る

。流るる、さしに動揺、他人と

鉗制、せんとする、

。席の街、鉗、幾人も

露れし、廣袤、席の

。先考の衣、鉗と結ぶ

。先考の、鉗、静る

。こゝな、鉗、は、

。車、鉗、中、

。海は見、鉗、又、鉗

。年は匿せぬ、鉗、鉗、

く現れぬ、霜、

。銚りに、鉗、鉗、

を、鉗、鉗、

。鉗、鉗、鉗、

。重なる所援助。鉄肌鑄造。

。待^カ注^キええし。

。口は鏡面手は入し。

。素は鏡意縣命、丹誠。

。結の鏡鏡、万の気性。

。一所縣命、信眼もみす。

。華族懸絶の山色。

。暑さの増したる、鑄夏うたあ。

。釜山せふれこな、如所ら^{セウヤン}。

。表立乃道めやえまを、金鑄^{カネ}富。

。たのまの俣、東一部と子。

。用設しを時、^{御陰}御陰^{御陰}。

。一永年の臥床で身心共、鑄表。

。数重たれら失敗ル、立元を。

。鑄沈したりの、理^{コト}たれし。

。鑄を七甚し、威^イ此るこ。

。新成置たり。

アイザールといふ錢癪 估定

二さうを

。鉄鍊てつれんとて地ちの重おもさを慰なぐさむ

。万よろの武ぶ士しの信しん守しゅとす

。銅色どうしき人種じんしゆの轍わづらひとらふ

。鉄樹てつじゆ子こ

。女めとて好このむ

。春はるは折よぐ。屋やの花はな修しゆ々々、青あお菜なの

。女めとて好このむ

。一ひとの狗いぬ上うへ望のぞむとす

。勿な得えん

。日ひ中の櫻おう咲さき、満み都との東あづ白ま

。爛漫らんまん。其そのの財さい布ふを腰こしにさす

。觀かん光くわう園えん捧ほうとす、人ひとの世よの春はる

。この身みをたぬき、女めとて好このむ

。方かたまは、心こころの程ほどにたん、口くちの体てい

。に、寒さむさるや、コルクスの病びやう文ぶん

新近 さんまじり

。二十三番のものは、さ唐唐をばらぬ、あ銭入

樹子といわれ、こみ左のふらふ、こ

いといふる人に、ああやふい

。ピラブルいといふれ、あ郊外に来

口式の煙毛を先づ、ああふは

錦衣王衣、ああふは

ちん

。彼は錦繡の膳、ああふは

。金銀錦繡の輸入、ああふは

あふは、ああふは

。録々何とせり、

。錯股の苦のあの人、ああふは

。錯の末の利益をあの人、ああふは

。珠に銭癖と、ああふは

。夏舎のあの時

。皇御錯のあの時

講コウのコをカけケにニ。そのソノ喧ケン鬧ノウたること。

。めメんンくクふうフ、すスわワこコる。錯サカサマ悞カ！

二人ニヒト錯サカサマ悞カとトしシてテみミたタるル能スはハずズ。

。錯サカサマ悞カとトしシてテ傾カガム聴キしシてテおオんン。

。厘セン髮ハツ白ハク髮ハツ。錯サカサマ悞カ尻シたタりリ。

。少シウ主シュのノ請シヨウ子シとト錯サカサマ悞カ覺カクせセたタんンはハ、

。鈕ニウ有ユのノ鐘シヨウ々々たタるル人ヒト也ナリ。

。鐵テツ中チュウ錐シ々々、

。錙シ々々銖シュのノ利リとト争シヨウ小コさサるル人ヒト。

。錯サカサマ職シヨクのノ礪リ部ブ。

。唇シブ根ネ月ツキ條ジョウにニ送オウるル。

。あアまマけケてテ卵ランのノ身ミまマるル。

。あアれレはハけケてテはハ。

。七シチ白ハク々々んンにニたタらラしシ。

。引ヒキ丸マル二十ニジュウ人ヒト。妻ツメ所トコロ。

。月ツキえエはハ棟トウ梁リョウのノ又マタ鐘シヨウ琴シン人ヒトせセらラるル。

。徳トク川カハのノ廟ミヤウをヲすスるル。

。鐘の音のつらさアガたえ。

。アガたえの在るんニシテとて子守り

なり其評には銅色人種か

クワイ知れどちたをい備山の洞

元宗の如く申には、つと

めやうん 鐘ツツの音ネが下つるなりと

あり

。其の音の響く罪人を折つて

く攻めこみんうを是た時

支那の人は漢人と其めこつて

と取ら、ワイロウの如きもの

銅鑼すゝるとよことさきえん

こゆたとてさうこはちるよ

。其の紐をいきてたのは其下向の

鐘のつちるを、元音暗れ、青葉の

蒼然

。湖邊の音は中央南の鐘鑼

○ 掩耳盜鈴し合良合良堂堂

○ 鑄鑄を新新るにに誑誑彼彼のヨウヨウニニヤヤ

○ 何何付付し。

○ 惠惠比比志志ららいいややはは、ハシシヤヤチチレレモモ

○ 中中の京京ルル兩兩ンンをを鑄鑄失失ハハツツチチララんん、
カララヤヤ

○ 夫夫婦婦とと強強ひひ所所けけるる鑄鑄かかるる供供

○ ツツチチララんん

サササチチ

○ 大大平平淨淨はは鑄鑄一一ツツナナしし

○ 鏡鏡のの女女ししいいちちららんん。

○ 臥臥床床のの身身はは耳耳ととししのの見見るるもも

○ のの比比のの鏡鏡花花ののハハッッチチララんん。

○ 二二太太ししキキとと鑄鑄人人のの女女しし

○ 刺刺賣賣しし鑄鑄廣廣ししんん、ハ木木也也。

○ 五五系系兩兩鑄鑄堅堅臥臥、ハ鑿鑿々々

○ 鑄鑄々々鑄鑄所所、ハ金金名名のの鑄鑄

○ 女女のの耳耳のの鑄鑄々々とと凡凡をを流流

○ 一一年年ええらら。

○ 鐘鼓鐘々、鐘鼓

○ 鐘鼓の音、鐘鼓

○ ストーンを震し、降る

○ 石は、鐘鼓を震し、鐘鼓

○ 鐘鼓の音、鐘鼓

○ 鹿の音、鐘鼓

○ 牛の音、鐘鼓

○ 鐘鼓の音、鐘鼓

○ 鐘鼓の音、鐘鼓

○ 元瓦と、鐘鼓

○ 元山、鐘鼓

○ 飛、鐘鼓

○ 城を、鐘鼓

○ 事と、鐘鼓

○ 言と、鐘鼓

○ マルし、鐘鼓

人種偏見

道東に於ては、村志に於て起るもの

田村義雄の演説

人種排斥と無産階級運動

アメリカ人の種差別運動は

プロレタリア運動に於ける解決

本邦に於ける種差別運動と即

けることは、即ち白人自身を即ける

事である。今迄の種差別運動は

如きは白人に於ける白人種人

は或は種差別を以て種差別

と云ふ事である。この種差別問題も人種

的偏見に於ける白人種人の

が起るものである

。種差別の歴史(種差別の歴史)の演説(演説)を

。北平(北平)の

。先づ(先づ)の種差別の種差別

伊予の寺の院香亭香泉

。落英ふんく、落紅、落花、

。新英横緑、

。昔々肥田、

。艶々肥田、華、華、

。蓮華、蓮華、

。月窟し天晴、夜流、

。おとど甜水し鳥たし、

。いと淋しし、

。殊陽將ハ如、高山の陰、

。女とすら垣、

。ゆすしし、姥櫻、

。い如、新、人、

。奇、思、如、想、稀、見、

。事、

。津、楚、年、の、傑、不、リ、言、家、運、

。荒、方、事、

甘露丸の事、甘露丸の事

香房の事、香房の事

阿母、阿母、阿蒙

阿母、阿母、阿蒙

阿母、阿母、阿蒙

阿母、阿母、阿蒙

阿母、阿母、阿蒙

阿母、阿母、阿蒙

阿母、阿母、阿蒙

阿母、阿母、阿蒙

阿母、阿母、阿蒙

阿母、阿母、阿蒙

阿母、阿母、阿蒙

阿母、阿母、阿蒙

阿母、阿母、阿蒙

阿母、阿母、阿蒙

阿母、阿母、阿蒙

○ 冥日の月は概して雲雲に閉

これ陰森なりと書ゆべし

○ 若を知らず陰蟲の音の

所更なる事あることたはしく耳に

心持ひしし

○ 二月とくは日中の入梅、イロ陰森カ

ふくしし陰濕、陰樹イロ

ること甚かし

○ 連雲陰々として尺咫を去る

○ 花園とて字は出と頼々しめ

之は類もいみじきは

に陰柔野早

○ 時日十日昔い陰イロ如イロ

かゆふけし

○ 流塵より墮たせり夫イロ隕石イロ

○ 隔三思いなるイロ叶イロ交イロ

○ 夜とて暗くしと存イロ精陰イロ叶イロ

○金一ニメサとしつとも健康せし
つれは、サラサウチウチと云ふ
徳志をとくめこんだのひす
○

諸葛孔明 八〇二

評 賢王親しき 倭王を遠しる

これ通は痛の主意 親キ、到りて業

息痛恨する處 干たすうレ下

これ為に拒免す。

前後先帝の文は十一、忠王の

勤懇心持るを見る

この心を在るを是くへし、循還訊

訊て、手すく 釋の忍ひす

○ ○ ○

○ 昔二月の 諸葛孔明の表

李命伯の陳情表、皆一併狀とす

肝肺申さう流あすゝの如し。殊

に所贅の瘰を見たり。これ公、

涙を随せぬ者は不忠の人、

李令伯の如く陳情の表に讀んで

涙を随せぬ人は不忠の人、

韓文公の如く十三郎とある文に讀んで

涙を随せぬ人は不忠の人、

と云ふ頃はきえん、しかんとせうとする。

古来の如く文章を讀んで涙を随せしむ

人はどのくらゐ可なり。この文を讀んで奮

起したる者はどれくらゐす。今後

と云ふ亦、この文にうそは許さず且つ起つて

はいくらするやわらうない。念に

千古不磨の雄篇傑作である。何と

それな、孔明の文才が然らしめるべき

は多い、只一の至誠である。至誠なるものは

至誠なるものは。至誠は神の如し。

至誠は能く人を動かす。吾人は先づ

すべからず至誠を修むべし。

至誠の溢るるといふは、文章しあひ

すかたまつてくる。心に惰気の起つた

とき、一字づつ重じり飲んたう好い。

典有田家に在ることいふう。

1931 June 5th

。乱階の沖一渡

。藝馬互噴、以報親

。新^物可^物端の陰^{キワ}を^の天^言言^はは^かか

たひ

。しかも佛教の研究のあり、自ら

野山に立竹籠らるといふのうんち

。吾々のあり。其吾々の方には

。人旅起息、世の世を鈍せり

。んは止すおとよ、仙人味を因

し、おら。セシル、テニ

。法書魚の行路りと、俳優の調^{テウ}

。扇も流つておら。凋^{テウ}座平

。陰^{テウ}天士、花壇に隨玉

○ 御取三年、眞又おとし、外お
まわりのた。

○ 来入の感、何なるに、教書し。

○ 眞又言、ど、何にも、
まう、に、流れぬ。

○ 猶は、一、眞又眼する、
秋、ぬ、び、ち、ら。

○ 眞又、影、さ、が、し、く、
子、影、と、同、し。

○ 顔に、花、斑、する、のは、
白人、甲、の。

○ 賤しい、と、う、い、
陽、に、さ、か、れ、と、う、

に、ま、ち、し、

○ 門、の、所、を、
舞、と、張、る、

○ 舞、
と、決、す、
晴、
と、

○ 舞、
な、身、
舞、

○ 舞、
を、に、供、す、

○ 舞、
依、折、衷、の、又、

○ 舞、
杭、
使、
に、

○ 舞、
言、
は、
、
舞、
ま、

○ 舞、
葉、
を、
お、
ふ、
、
文、
を、
改、
定、
す、
ら、

○事_ノ紀_スル_ニハ_ハゆ_テこの_節と_提す。

○先_王算_余する_ルハ_ハ仲_する_マと_鉤す。

○多_クと_實る_ル事_トを_知り、_結す。

○拊_テす、_竟由_レと_結す、_以て_是を_記す。

○に_建ぎ、_恒に_兀兀_とし_て改_メる_年

○_カに_出る_也。

○_缶漏_レと_神直_レ、

○_敵陷_レと_填神_す、

○_關漏_レと_裨神_し、

○_異端_と舳_排し、_伊老_と攘_在し。

○_先邪_と攘_陳し、

○_陸渚_の茫_茫たる_を尋_ね、_獨り

○_百川_と障_へん_之と_東せ_め、

○_狂圃_を既_に衝_ぬたる_に同_す

○_曠郁_に沉_浸し、_某を_含み_華と

○_唯此_、一_章を_作る_也、

。いーの陣々として涯なき。

。周詰般般盤の徒属整算牙下り

。春和の謹厳育る。在氏浮誇

たつら

黄色い　　く　く　く

柔月に永住してある（今までのこと、

近憶と微笑と感傷かよみる）

つと来の　　けろー！　上野と立派ルな

つたなぞに見存せえるやろ。西行

さんの銅像又は、矢張何の儘、

まっくらと見える。まっくらと、いー

樹のそたか、奇麗なこと。

。砂糖の菓束のちあつたので、小気

はちか。空城も拜ましのやろ。

何より新しやろ。あつたは、

ちのフジヤマのままに、と見

とてやろ。

。五十一、五十二年の朝鮮半島遠征。其無のす
に、はたせしめざる。地も好し。極
之喜更ら郵喜のまじり得
看之あるは、とうも子也の體
居た、い、ておまの。稜子神を遠征は、
バロイヤン、イングリッシュと、日清
戦、日露戦、日露戦時式に
流りつた日本流と主、チヤンボン
に、海心村、下油、い、造し、あ、
古くらう。

。狩喜のは、嬉し、と、堪、ま、か、い、程、
た。今、は、ア、メ、リ、カ、の、領、土、に、各、を
理、も、ら、し、も、り、ど、は、あ、ら、ぬ、。狩喜の心は
狩喜の感情は、壯麗のやうに、執
念、深、く、母、白、く、や、パ、レ、吸、の、は、
あ、ら、ぬ、。

。日本、人、ヲ、ニ、世、は、何、と、奇、好、な

存せしむる。十年の幸しむる事也。

日女令てしあり、同時にアメリカ人

の如何の得たり。この世の女年

女も遠くは、後年の中にも、けしき、

けしきあり、彼等もあしる、真夜ツツ

こころ。如し見る女母の口はヤパン

か、貧弱い、終に景い、みすけい

しして、諸もあいの事なる。

。アメリカに無遠慮に、市道

たは、一は、恥を、さし

知れし。

諸もあかそ。

とん、諸もあかそ。

たは、所屬人知る、ブリスト

テムブル、ライオンをり見せ

らあらん、たは、河ん、陰丸

あは、大、街

。これに對しては汚いし、嫌う。同じし。

得たしと事たふ、やうやくするにお。

人ロイ土人の態度と同一であることも

感^たるかい。この感^たるしを評と評する

いゝいゝ

うん、丸の丸古けは、事^たの教^たたえ

事^たをめぐり、丸の丸のアメリカ式^たの

デング街^たにけぬ、事^たの美^たの

事^たうこのひ^たからし。

× × ×

日本、人オニ世の生活感情は、年々

アメリカ化^たのするふしい。式^たの

一、血^たすうも教^た育^たし、さうも、封

建^た的^たな優^た雅^たさと、同時に陰^たの

さとと持^たつた日本の文化^たすうも、アメリカ

登^た中^た皇^た美^たの、自由、法律、服^た装^た、

輕^た敏^た、成^たる程^た、櫛^たの尾^た古^たけは

派手な奇麗な悪くはない。

。彼等の思想感情はアメリカ凡
に於てあるのは、不意に感じはしない。

彼等はアメリカ人の社交ダンスを好し
く、彼等の親戚だが、見るからうに

無礼な服装をして、ガメと物す

る、本製の履物をはいて、街と

まじくと恥ぢる。親戚は、

将存仰るお計にナリケン移の塊り

と字の「團子」を念へてすて、

「事のと、ハリスクリンへ戻すたわん、

は、エラスピア、エントレ、ロングフエ

「^{コエホ}」エマソンを講ぐん、

に、^{コエホ}集あう、親戚の教育

と親戚は悲しむ。りある。

。失張りを人だ、おれに行き辨る

好い、鼻持ちのたぐい、エマソン

物より下等なスーパと飲んじ、米と

食ふこと、スウアと食へてゐる。云々。

待つ事か、アメリカ人の待つ事か、

つら、い

。直る。待たず米人達を待つ事か、

嫌しめら事は、確りある。

。日本人と強硬したふら、趣味を違

は。教育の進歩を喜ばす。私の知

るおら一人のオニ世は、ゆふたの

講席を耳と、所ん存その向は

leaf 古とまらこ、へつと、^ル重と吐して

見せん。アメリカ人の事と得

三三としてあるオニ世は、三三、日ヤの

せこの裁い、女二股して着付る、教

育たれ先娘、東岸の陰ツな、¹¹正

い思慕感情と持つた身は、¹¹全し

縁のないものに見えろの、¹¹知れな

④ 彷徨へる神二世、彷徨するは、日
東人たのふ。それとも、現に二層の
口藉をたしめる様は、日東人と
米人の両方なりたるのみ、吾れし、せし
やうなきは、ある。その二のとする事
許されたる下、不幸なりと、日東
百人、一層大なる法界の善心起
さぬた増えは、一、三、五、七、九、不
去存とはよさる。私は、彷徨するは
果して、とらるるの一種の善心なり、
つぎに考へておらるる。
。言はれぬ善心の、生活の善心、
厚教の善心、善心の善心。

X
X
X

。私が一度陥ち込んだ運境から救はれ
、再び復活の曙光を見出し、今のは
全し中條さんの蔭の下に。

○正七の不心得は、さながら不平のさう
不満のさ、徒に任事し、今日しほい
とつた調子で、完具なれば、危様
と、乃子ん、来るのさある。

○事件の、直前と、先づ、頭心、浮よ、かつた
、實際、生活の、教訓、のさある。こゝに

この、教訓、を、裁判、の、結果、の、明確
一點、の、疑、を、た、い、さ、う、と、し、現、在、の、

こゝに、

○何か、さあ、した、幾、の、的、に、組、み、ま、す
ら、か、ん、法律、の、さ、う、の、さ、あ、ら、う、と、和、も、す、

さ、う、の、さ、あ、ら、う、の、さ、あ、ら、う、と、こゝ、の、概念、

法、の、さ、あ、ら、う、の、さ、あ、ら、う、と、行、く、と、

法、の、さ、あ、ら、う、の、さ、あ、ら、う、と、請、理、的、の、さ、あ、ら、う、と

法、の、さ、あ、ら、う、の、さ、あ、ら、う、と、社、会、の、さ、あ、ら、う、と

無、視、し、て、了、る、と、好、い、と、さ、う、と、

た、ら、な、い、の、さ、あ、ら、う、と。

極端な例で云へば、他人の地所を
いぢるに土とついで申すたとしておは、
これか罪らふに竊盜罪を構成す
ることある。これとして刑法は
昭々たることなり。十一年以下ノ懲役
に處すと。

。所謂風化債權と稱する頭角
を現存し、臨時環境を盡んて來
たかといふと、何が一やういふもの。

。つまりぬき取り惜みぬよ、このよとポン
と取つて了つた。

。時々は随分環境に陥るは、
前途を危ぶまゆも、時代もな
る。

。これに實息うたは、
と云ふに、了るるもの。

。一。言。蹟。と。と。実。事。と。稱。根。の。陰。に
ありあはし

申。公。一。田。の。詰。不。備。の。記。

。ハ。ハ。ハ。事。新。し。し。構。成。先。生。と。正。規。の
す。ま。い。の。居。す。る。と。信。ず。る。法。案。

。中。年。に。あ。る。先。生。の。公。生。涯。に。就。て、
不。良。症。患。者。の。み。づ。も。解。利。と。極。め。た

。又。ス。ウ。研。究。は、既。に。世。評。の。自。ら。定。ま。る。し
う。あ。る。子。孫。の。後。半。に。於。て。法

。昔。日。の。象。牙。の。塔。に。大。富。院。に。立
て。龍。の。時。流。と。見。康。た。ド。イ。ッ

。流。の。概。念。論。子。に。敢。然。抗。抗。し。て。最
近。頃。に。勃。興。し。つ。つ。あ。る。自。は。信。仰。の。又

。を。此。と。傍。時。既。に。判。例。に。於。て。如
く。其。に。示。し。て。世。に。同。さ。る。る。等。事。者

。は。先。ず。の。其。の。世。と。共。に。絶。へ。る。近。赤
を。携。け。行。く、其。の。善。の。良。心。に。お。し

またの強き息と感ずるものあり。

○ 法曹殿の玉座たる。大富院也

にまを昇進しん先をの。

○ 会社の金で降りするが、何か、何んとか、

いふエキスと持たおだけおめ。其軍人

飲末諸口控覧ごする。さよと後子

かお来ぬのむ。系事、短人観壇の

親交あむあり。

道聴^{トセウ}漣^{セウ}親^{セウ}とホテルのボトイ年

と降り法のとし得ま息のい

す仲士も何あり。

笑むのあり。

○ 何々として使用され笑むのあり。

○ 帝国のアヤ、ポトとして耻^{ハジ}しおらぬ

ものと作る笑むのあり。

○ 天を道士杉浦重剛の四男

笑えとよあ鹿^{シカ}、めつたこと

○ 親馬鹿^{シカ}や、リリとマウと

喜はけりからんさうに考へらる。

。満の選校委の事として東京に

お父は、甘自分には、お上の禁用で

この向する身りあらはと、りか自遊ん

と、このお十持の生れを報月

の至誠といふもの結成つて、うさ

くしに飛ぶぬ、飛ぶるまを、その

は有りたははらん。

。秋の神といふものは、意は保長、

まことによきおれを飛りと感心

であることかすしやう。意は地所

の體報者うたはれは傳初ル事本で、

。瘰癧を撫して白傳津の許せば、

。と時事う目にみたりしこと

概略し、飛す、たか、甚く時地

え、やまは、まゝ丸か、阿のむせを父

の眼の小花に、あかん。

ついで

。安ん、自意と、意心、多に、七、
其、文、の、中、に、

。七、
其、中、に、

。其、中、に、

。其、中、に、

。其、中、に、

。其、中、に、

。其、中、に、

。其、中、に、

。其、中、に、

。其、中、に、

。其、中、に、

。其、中、に、

。其、中、に、

。其、中、に、

。其、中、に、

。其、中、に、

たうらん、まあり、百集、ハ、毎

知し腹とやわおはたけらぬと云ん曉

しちくくちや

たうらん

赤口の牛律

。父の詩は、即興詩人うえはがすま

す。如何に自然と云ふしんか。

春のはな、掃部、夏のうた

み、おれ、度庵の、まのま

鈴虫、杉虫の音、秋の月、菊、

紅葉、冬の雪、梅の匂い。

。白馬鹿の、死をい仕舞へ、心

今、考へると、果に泣汗のまき。

。死の床に、就るかよ人の知れぬ、

主派は、あまの、細々と心かよの

甜き心と、結ぶんしりと見えま。

。一、一、気め、と云ふ涙と、俱

喜ひん、あや、ん。

つら

武士の子とてふは、まんじりこといふ

はるはる

おあふと何事かおあはれにゆく

おあふと何事かおあはれにゆく

おあふと何事かおあはれにゆく

。男子は、無後の義務す。同時に

女子は、お産の義務す。とす。女

子に、深しきお産は、お産にゆく

お産とて、お産の義務、手続

を、お産に、洗滌、お産、裁縫

お産に、お産は、お産。

。講談、お産、お産、お産。

お産、お産、お産、お産、お産。

お産、お産、お産、お産、お産。

お産、お産、お産、お産、お産。

お産、お産、お産、お産、お産。

お産、お産、お産、お産、お産。

けりあし行し時一人も附りて来
る事ありしとある者も甘みらん。

何んとしも不甲斐なきし奴等いかに

今の限り全部破門じや、あて

行けぬ。

ふし、

。誠心慙愧に堪えませぬ。

。折價下落り趨勢に立ちまはす時。

。今もやめおかしし人生の幸福を福を

契しに飛り。

。金の餘り飛る時借入金光利子と

掛る運けぬ

。自分は糟糠者にも飽かぬ生流めう

ちか死んでらん。

。尸位素餐、月夜餓死、

。何處の毒も平治は祖公の尊是

ひかりん。

。體格、尊貴、猫か見ると

。聲、動、くまを、見ると

孝勇と俠勇 と

あ、天晴れ存る振舞ひは、あたる
若武者と秋にかけんは東意なる
が、信忠殿、随分孝道武道
と厲かき山よ、さうは、所免所
と云ひすえ、勇首圓らうと義孝
は駈かけりきたん。

信忠の孝勇、義孝の俠勇、
誠に武士道の孝道である。

老人再執政、 と

とさはおおしく、さうおた通り、再執政
は愈々去り行くと見える。これに
と自分の顔のほの皮を剥はぎ、眼玉こすり扱
りて死んだのは、親おあつたし、妻
あおあつたし、天にも地にもたつた
一人の妻と楽しこのことに再執政は

河とふいぢらしい心でさがる

其政の婦は侯に亡れた。同時に

そのまゝ、**獸**こゑは自分の生存

は助かるとさうか、これには驚かす

ふまへと、弟の老所が永久に堪

ひぬとせよと、いじつと

はあつたあつた。

ゆさうん、たとひ、自分は殺さるる

とし弟の老を**顯**ししやうおは

たふぬ。

ついでに其政の婦は早其に

あつた。

おこは立女の弟で、**軟**の深井屋の

其政とらうとくさう

とさう、**後**に先づくと、自分は老

みまへに弟の屍に重なり、

御せん。

韓王の老を**壯**とて、**狼**

日露の役に我々乃本將の
如き恩を失はせぬ時の
にし警方警部といふ
事西迄今古に通ずる
あらむはたむか。

ふじ

○A 野山の麓に庵を結ん
て住しく
○B 野山の麓に庵を結ん
て住しく
○C 野山の麓に庵を結ん
て住しく

執権 北條時頼の母の菩提

うためとて干僧供養を先時のことと
あらん。折梅通すもの花
しい若者の酒息を
の時頼公は世に稀なり
耳えぬおたか、耳しと
見るとはたい

青砥屋

尊入の、これなどは喜提のたあどころぬ一

えの申にいほり成さするやうなものと云

と云やうな。これと耳キつけたる

は二階堂、信濃寺、直に表者と

引つ挿へし時頼の所に連れ之行

き、すうし坊をさゆとせられた。

時頼は北条常の娘とて、

地蔵の母堂の喜提のためにと彫らて

しとあらんとと塵芥のやうに罵る

とは不埒な奴、干僧供養の所

故に血の中へ尿するやうの女のいじり。

立派に云禪、立たぬにたは許

たぬと云

とハツタと表者と腹をつけた。如

表者は女もあつ慧のれが

おそれば、こゝろハリヤウする。凡そ

佛事依善は慈心悲心を専ん

するるとか一耳き、及びのすうら。や、

きろいゆう

北は、貧乏しい者と救恤せよと

こそ、徳義辰とて付くやせうか、近

頃つらうに富めんじ奢るうと極め

つら儲儀に布施しんところを

何に付くやせう。

ソウ 屎と田畑

致しますれば其も穀たうの肥料

に付くやせう。其の中へりたよ

しんをは何の足しにしたりや。

せぬ
馬。

とき放つん。やすれば時頼、

この言を耳しとハチと膝を打

つこ、

お天に口あし、人をいふ言はしむ

るうしや
馬

と著者の無利と評し、徳近

と古し使ふことにはあつた。この

書
破
馬
線

後の老彦青砥藤洞で

あきら、

テテネの町の集本会では、一世の大

雄辯家デモステネスが、国家経

緯の大策に就て、今ぞ心からの執

筆を振るおます。か、軽佻

迂屈な民衆を逐は、一向に於て

金の言葉に耳を傾けようとは

致しません。僥倖の念は全聽

衆の擡めようとする。その時

可なり。諸君、私は敢て

何事かの音程を張りおさう

と、言は、テモステネスの聲

か公衆の耳を打ちました。如

彼、一、俄然公衆の心を替

わし静まり返った。

ふと、^か挿める不安な気配

艶^い麗^なに、^チ屋^じの^ひ年^ひ下^りと、^カ一^つ夫^とし

假^ま寐^どに^らび^る先^もハ^ナツド^か、^は見^えず

リ^ま双^まう^ふ眼^なと見^え困^ます^ん

それは^い恐^ろしい異^ぎ教^{きやう}徒^たの刺^さ害^{がい}のト。

た。狀^{じやう}も^も蒼^{そう}ん^んず^んだ^だと^と育^{いく}は、^い既^いん、

マホメツドか、眼^{がん}筋^{きん}に^にま^まの^の評^{へい}に^に擬^ぎ

さかち^ち辰^{ちん}ま^ましたん。

の^の隻^{しやく}誇^{かう}者^者マホメツド、この^の期^きに^に及^{いた}ん

の^の猶^{なほ}油^{あぶら}を^を救^{きう}ふ^ふも^もあ^あぢ^ぢか^かる^るあ^あな

？[？]と^とニ^にツ^つク^くリ^りと^と笑^{わら}ん^んた^たま^まの

刺^さ害^{がい}の^の毒^{どく}を^を斬^きり^りつ^つて^て、^さや

と^と大^{だい}き^きに^にシ^しザ^ざル^るマ^まホ^ほメ^めツ^つド^どを^を見^みん^ん下^げ

し^しました。と、^ま其^{その}瞬^{しゆん}間^{かん}に^にあ^あり

オ^オケ^ケル^ル。刀^や下^げの^のマ^まホ^ほメ^めツ^つド^どは^は素^す敵^{てき}の^の一^{いつ}

うし

。天と拮据し。ただ一読、与神
と評した。

何と云ふ強心信念、何と云ふ信
仰に非ずた。24の21した。——

種の神韻。さしめたる。一読

に刺戟は思はずし。その七の
二取降し。すうたうした。

。賣しげな女。あつた。

。すると五年は林のしげな類

きし。

。さし誇らしげに

。耳を將校は誘引し。鹿

獲した。

。ああ、さういふうた、あんな

人。及あぬ。その掛す。——

あし。あ所のその掛に

愛びて 待たぬ 今日かす

人にたうことと許しとやうう。 30

の先陣には秀忠の居り、三右は

後陣に備へよと許さぬ

す。無念ありと、とや寿とやをや標す

つて我慢しとあり。

涙を流し、その日の夜に一人

に命をせちありと、建念か

天。杉平在左門太夫正綱か

取做し類ん、

印表様んは、あつておるう

い、りやうなは、あつておるう

と、斯様、あつておるう

す。ま、ま、ま、柄、れ、ま、ま

と、慰めにかつた。うらと、頼直は

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま

何三年すぎ、秋の十日、嵐の時
は、~~再~~あつた。つらと、つらと、つらと
いつかと思つた。家康はこれ
を見て大に喜び、頼直の三の一言
何さうの手柄なると、^{たの}ま頼直
ぎ、和子ぢやと賞讃し、措か
ちあつた。

。やせを眼鏡まのけた用直
さん。すまはは

。その我のえ生と思はせら

。とつとつと、あか信頼と弱
とをすまをみゆ

。このライオンは日本の政界がト
なれたことは何の大ききお
を失ふたやうな、枯らして

Handwritten text in a cursive script, possibly a signature or name, located in the upper right corner of the page.

